

# 巻頭言

## 館長就任にあたって

ゲーテンベルクの活字鑄造・活版印刷術の発明は、宗教改革や科学革命の陰の立て役者です。今やもっとも貴重本となっている美しいラテン語の『42行聖書』はその代表的な作品でしょう。この活字印刷の普及は、宗教だけでなく、学問の市井の人びとへの開放を促し、知識の特権階級による独占化を終わらせる第一歩となりました。その印刷物の低廉化の進行とともに、その印刷物の社会的影響は大きくなり、それゆえ、特権階級の人びとは、印刷物に課税するなど、「知」の普及に神経質になっていきました。この印刷物がもたらす「知」は、当初特権階級の私的蔵書としてなおも閉ざされがちでした。しかし、19世紀のイギリスの公共図書館の発達に典型的に見られるように、次第に、人びとにしばしば無料で自由に公開されていきました。図書館の開放の始まりです。

この「知」の開放という視点から、現在の情報化を考えてみましょう。科学技術の進歩は、「知」のメモリーとその伝達手段とを、紙からフロッピー、CD-ROMへと、アナログからデジタルなどへと急速に変化させてきました。「知」の集積庫としての図書館は「知」の開放を進めるという役割をもつ以上、この点でさらにそのスピードを上げなくてはなりません。スピードだけでなく、これまで「知」を享受し難<sup>がた</sup>かった人びとなどにもさらに広げなくてはなりません。図書館の市民への公開もこれまでに以上に必要なのです。

しかし、このように「知」の獲得のスピードのみを追求した場合にしばしば抜け落ちる側面にも注意を払う必要があるでしょう。それは「知」という無形の財産もまたその獲得には、職人の仕事に似た繰り返しの、そして暗中模索の作業が必要だということです。身に付く「知」とはそのようにしてはじめて得られるものだと思うからです。まして、「知」のコンテンツの更新にいたっては、科学技術の進歩によってではなく、それに助けられるにせよ、自らの真摯な知的営為によらなければならないと思うからです。そのために、自分の足でこの全館開架の大学図書館内の「知」の探索に出かけて下さい。今の自分とは異なった自分の発見にいつかは結びつくでしょう。

大学図書館長 井上 琢智